

一語文、二語文の生活語が文字で表現
できる子を目ざして

八木恵美子

1. 対象児のプロフィール

(1). 生徒名 T・O (男) 昭和45年5月18日生 (中学部3年)
51年6月より精薄通園施設 (若草学園) に通園。本校小
学部より入学し、現在に至る。

(2). 医学的所見 ダウン症候群

(3). 諸検査の実態

⑦ WISC (昭和56年4月実施)

CA-13:1 MA-4:11 IQ-38

⑧ フロステイック視知覚発達検査 (昭和58年5月実施)

I—7:06 II—4:09 III—2:09

IV—3:03 V—4:00

(4) 特徴

- 人なつっこく愛嬌があるが、喜怒表衆の感情がはげしい。
- やさしく、下級生の世話等よくする。
- リズム感があり、音楽に合わせて踊ったり、歌手のまねをよくする。
- 言語は、不明瞭であるがよく話しかける。
- 言語的、数量的な能力に劣り、学習したこともすぐ忘れる。
- 少しでも困難な課題に直面すると、すぐあきらめたり、泣き顔になって、人を頼ろうとしたり、逃避の言動をとる。

2. テーマ設定の理由

ダウン症児は、一般に人とうまく話ができないとか、人の言うことの意味を理解できないことが多く、その上、読み書きの能力も劣っているので貧しい言語生活を送っているとされる。しかし、ダウン症児が成長して社会に巣立っていくためには、人に自分の訴えたいことが言えたり、人の話を聞くことができたり、自分の名前や住所の読み書きができ、身近な人に簡単な手紙が書けるなど、必要最小限の言語能力を身につけることができれば、社会自立に役立つと思うのである。

T.O 児は、発音は不明瞭であるがよく話そうとし、自分の名前や住所が言え、名前は、平仮名でも漢字でも書けるのである。筆順はでたらめだが、視字は好きでよく人のまねをして書こうとする。

しかし、自分が書きたいことも、ひとりでは全然書けず、作文の時間は、名前だけしか書かなかった。同じクラスの他の三人の生徒は、かなり長文をどんどん書いていくし、自分では書きたい気持ちはあるが、二文字以上は続けて書くことができず、いつも劣等感を持ち、「ぼくは、バカだ、バカだ」と言って頭をたいたり、いらいらしていた。

本児の一字一字なら読み書き可能な実態を、一語文、二語文で表現できるようなになったら、劣等意識も少なくなり、生活に更に活力を生ずるのではないかと考え、この研究と取り組むことにした。

3. 指導の重点と方法

T.O 児は、一文字ずつは読み書きできるが、二文字以上になると、語句として読めないし、書けない。ゆっくり読めても、そのものの意味がよく理解できていないことがある。

そこで、まず、二文字以上の単語を理解し、読み書きできることを重点におき指導することにした。

指導にあたって

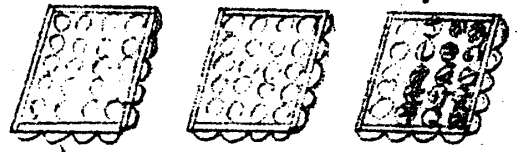
- (1) 一文字ずつの読みを、単語としてまとまりを持ち、かつ正しいイントネーションを伴って読めるように練習させる。
- (2) 単語パズルや、活字ひろいをさせ、自分で、二文字の単語を作らせ、正確にきちんと読ませる。読めたら書く。できだしたら三文字にする。
- (3) 単語と実物や絵カードとのマッチングの繰り返しを通して、単語の正しい理解を得させ、書かせるようにする。
- (4) 興味を持たせながら、書く作業を多く取り入れる。
- (5) 国語の時間だけでなく、朝の活動、帰りの会、他教科の時間にも、単語作りや書く作業を取り入れた指導をする。

と、いう方針を立て、実践にとりかかった。

4. 指導実践例

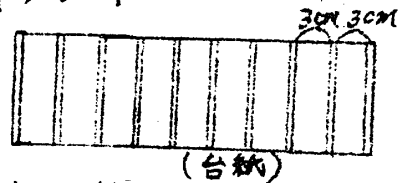
(事例1.) 朝の活動を通して

朝の活動の時間に紙活字拾いをさせた。紙活字拾いというのは、右の絵のように準備したカードを生徒達が拾ってきて、好きな単語とか、指示された単語や短文を作って自分の机上の台紙にならべるのである。



なし箱のしき板を利用して凹の部分にあいうえお順に五十音と、濁音、拗音、撥音、促音を書いた3cm四方のカードを20枚ずつ入れておく。

3cm
3cm
あ のカード



T.O君は、はじめは、得意の自分の名前だけをならべていたが、大変興味を持ち、家族の名前や、歌手やタレントの名前を教師に聞きながらならべた。興味を持って進んでやりだしたので、こんどは、教師が指示した二文字の単語を自分で拾ってきてならべさせ読ませた。読んだら、ノートに視写させた。そして、それらの単語を毎日、教師がノートに書いてやり、1ページずつ家庭学習させるようにした。

そして、二文字から三文字へ。名詞から動詞へ、清音から濁音や、撥音もまぜながら繰り返し指導した。

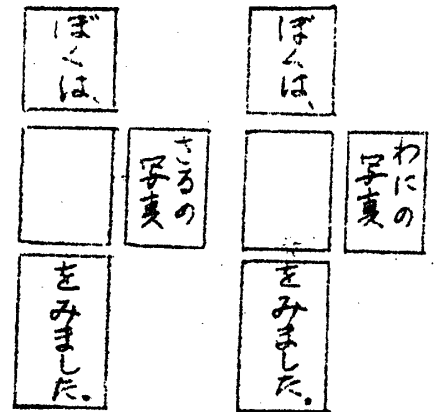
また、朝の会の日記を読む時、はじめは、拾い読みで発音不明瞭であり、その上、書いてないことまで読むので、何を言っているのか全然わからなかった。そこで、教師がついて、指で文字をたどりながら、ゆっくり、ぼくは、きのう テレビを みました。というように、はっきり語句として読ませるようにした。1学期の終わりには、「ぼく」「おかあさん」「おねえさん」「おとうさん」等は、自分で続けてはっきり読めだした。そこで、2学期には、これらの単語を書く練習をした。それから、日記にいつも書いている「～ました。」「した。」「～です」をひとりで書けるように練習した。

また、字を忘れたり、つまったりするとすぐ人に頼るので、絵もついた五十音表を常掲して、いつでも自分でさがさせた。

(事例2) 授業を通して

修学旅行で行った「池田動物園へ手紙を書こう」という学習で、T.Oには、「写真や文字カードを見ながら、一文でも自分ひとりの力で書かせる」という目あてで指導した。教師が、どんなこと

が楽しかったか、うれしかったか、どんなことを書きたいのか等を聞きだし、右図のように文字カードや写真を見て、文作りをさせた。写真を見たらすぐ文字を書いたので、大変良かったと思い、それ以後、行事後などの作文指導の時には、写真や実物を見せて、文字カード等と合わせながら、できるだけ自分で書かせるようにした。



(事例3.) 生活ノートを通して

帰りの会で、生活ノートの「学習したこと」「きょうの給食」を書く欄に、前面黒板に教師によってきちんと書かれた文字を視写する時間がある。T.Oは、一字一字見て書き、他の生徒の2倍時間がかかるので、4月頃は、大毛用紙に書いて、生活ノートのすぐそばに置いて視写させた。これらは、何度もでてくる単語で見慣れてきたり、聞き慣れてきたりして、だんだんと早く、単語として書けだした。また、パン、ミルク、サラダ等のかた仮名も書けるようになった。

5. 考察と反省

- (1) 4月当初は、日記を読んでも小さな声で何を言っているのかわからなかったが、だんだん続けて読めだし自信をもってきた。
- (2) 母親に教えてもらいながらではあるが、進んで日記を書いてきて、毎日発表するようになった。
- (3) 活字拾いは、喜んでし、二文字以上の単語も作れるが、順序が違っていても平気であることがあり、読んで直させるようにした。また、絵文字パズル等をさせ、単語をしっかりとさせた。
- (4) T.Oには、写真や実物を見ながらであったら書ける単語でも聞き取って書いたり、自分の頭で考えて書くのは、なかなか困難なようである。また、すぐ忘れてしまい定着しにくい。

6. 今後の方針

単語を覚えて書くまでに終わってしまい、自分で二語文が書けるまでに至らなかった。これから、助詞の使い方等を指導し、自分で単文が作れるように根気強く、繰り返して指導して行きたい。